

163

492

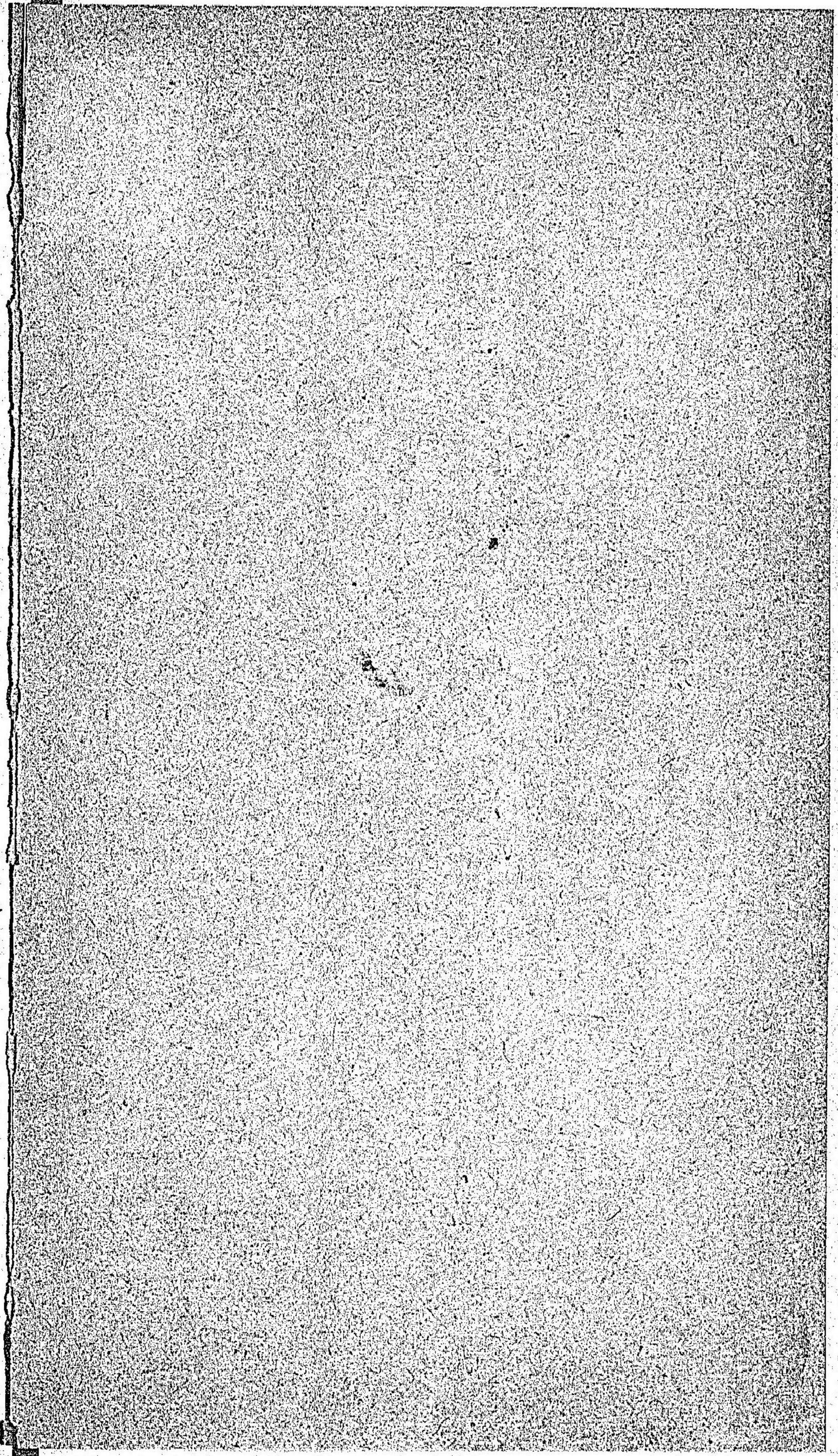
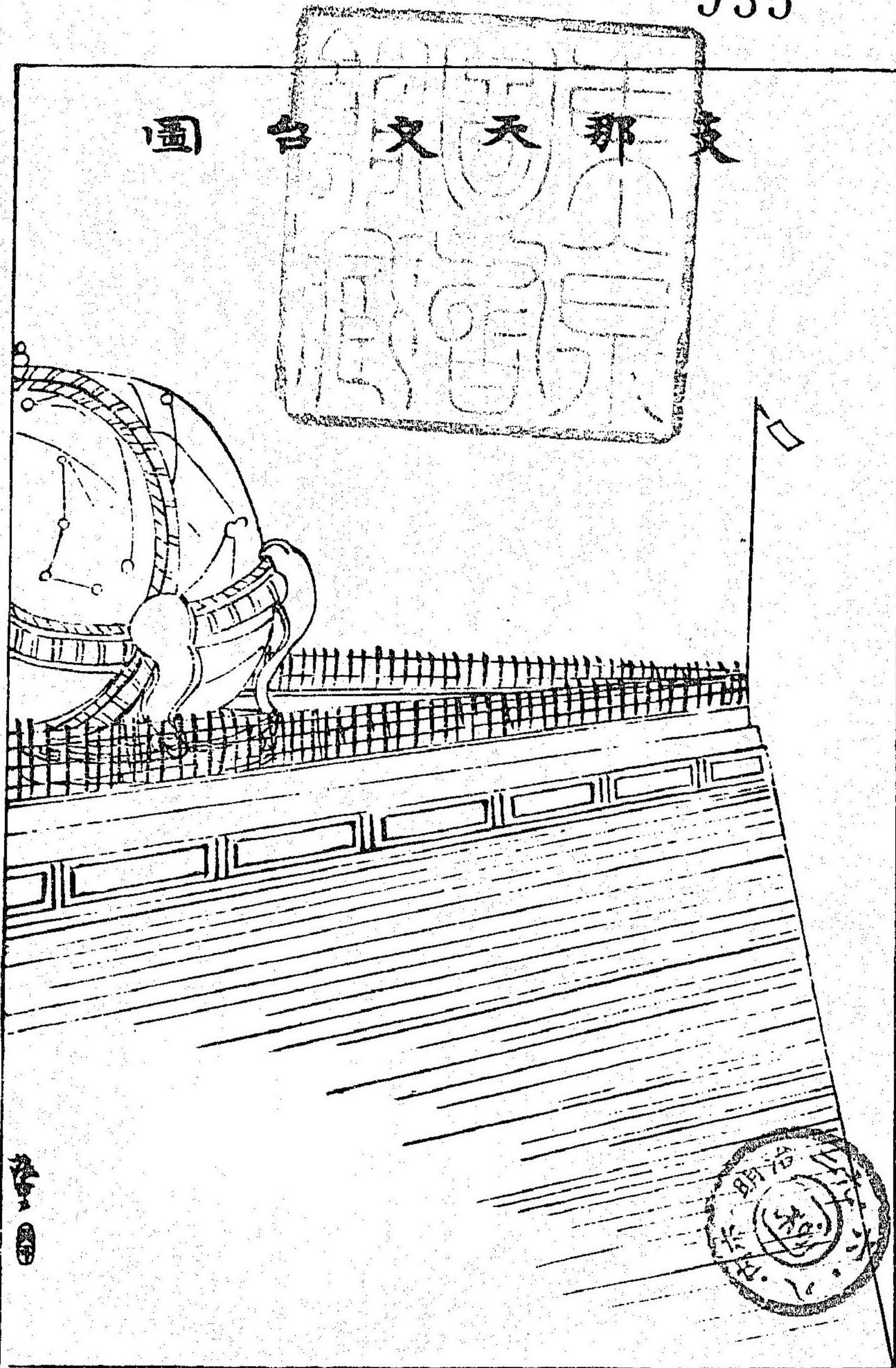
支那天文学全

藤山甚太郎著

東京 巖々堂發賣

特 29
935

支那天文台圖



自序

暗夜仰で天を觀れば碧空拭ふが如く幾億萬の星斗燦
燦來りて我俗懷を洗ふが如く身は人生の限界に在る
も心は無始無終の大宇宙界を慕ふに堪へたり斯心已
に宇宙に馳す宇宙は我有なり我有は宇宙なり即我は
宇宙なり宇宙は我なりとの大觀念轉々胸中に躍る是
即ち天狂が狂乎抑々漠たる此宇宙其經過を云へば無
始無終其の廣袤を探るも無邊無窮而して人智は限り
あり限りあるの人智を以て限りなき宇宙の大極を探
る固より難事なり此難事に當るの法他なし古人の遺

一
説を翫味し今人の學説を斟酌し採長補短以て己れの基礎を作り之に築づくに己れの大見識を以てせざるべからず且學術には國境なし其の説の出づる所如何を問はず之を研究すべきは最も必要なることゝ信ず余此天なる思想に關して古來如何なる説ありしかを探究すること茲に久し曾て天狂之遊園てふ一の備忘録を作る今同好諸士の乞に任せ其の一節支那の部を割きて印刷に付することゝはなしぬ今や支那の事日に非にして我邦との關係漸く平和に歸したるも泰西諸強國との關係遂に言ふべからざるものあり世人は

病國と呼び亡國とまで叫べり此病國實に今は老ひたり然れども古來東洋の大國として亞細亞洲の一半に立ちて我國との關係最も多き彼國の學説を探る亦無用のことにはあらざるべし此書彼國の天説を沿革的に最も簡単に最も平易に述べたるなり只恐る文章の拙にして意義の通ぜざるのみならず淺學孤陋にして到底一の管見たるに過ぎざるは是れ固より天狂が狂として一讀あらば幸甚

明治廿九年五月

天 狂 識

支那天文學

目

次

第一	發端
第二	蓋天說
第三	渾天說
第四	宣夜說
第五	四家說
第六	折衷派
第七	陰陽道
第八	曆道一斑

至自	至自	至自	至自	至自	至自	至自	至自
四三	三三	三二	二二	二一	一一	一一	一一
三六	六三	三七	六〇	〇八	七一	一四	四一
頁頁	頁頁	頁頁	頁頁	頁頁	頁頁	頁頁	頁頁

支那天文學

藤山天狂編述

第一 發端

支那は東洋の大國、夙に聖人賢者輩出して其の制度文物大に發達して古來學術技藝の進歩せること實に驚くべきものあり、殊に天文學の如きは諸國に先ちて研究せしものと見へ、彼の堯典に乃ち義和に命じ、欽て昊天に若ひ、日月星辰を曆象すと云ひ、又汝義暨比和、莽は三百有六旬有六日、閏月を以て四時を定め、歲を成すとあれば、此時已に曆日を用ひ、民をして時を知らしめたる

二
るや疑ひなし、然れども其の古を尙び、今を卑むの奇風、
却て其の文明漸く退歩の趣きあるは惜むべく亦憫む
べきものなり。

今や此老國に於ける宇宙觀如何なりし乎を探らんに、
大古はいざ知らず、彼の堯舜周孔の天地は、天圓地方な
りとあるは、其天圓とは日月は天を圓く旋りて往來し
且眼界の及ぶ所圓なるに基き、其の地方とは地は其の
面もと平なるも已に四方(東西南北)と云へば其の周圍
の境界必ず四邊を爲すものなりとの空想より、さては
天圓地方と解きたるものなるべし、故に曰く天の圓な

三
ること倚蓋の如く、地の方なること棋局の如しと、然れ
ども天と地とは其周圍必ず相合、躰せるものと推測し、
天地の關係恰も蓋と函との如きものなるべし、然らば
函方にして蓋圓なるの理あるべからずとの疑問を生
すれども、是れ先王の道なれば恐くは吾人の誤解なる
べしと、即ち辨を設けて曰く方は是れ圓の意なり、圓も
と方より出づ、故に地方とは地境方なる義にあらず、地
周圓なるの義なりと、又曰く天は其の周圓なるのみな
らず、其面亦穹形を爲せるは明なり、天已に穹形を爲せ
ば地の面平なる如しと雖ども、其實穹狀なるべしと、是

に於てか彼の周髀の説は起れり、是を蓋天説と云ふ。

第二 蓋天説

蓋天の説もと庖儀氏より起り、周公實は之を殷の大夫商高に受けたりと、其説に曰く天は恰も蓋笠に似て地は覆槃に法るとありて、地は皿をふせたる如く、天は之ををふ笠の如きもの、即ち天及び地の形状は毬の一部を成せるものなる乎、語を換へて云へば此天地は共に其中高くふくらみて、外低く垂れ下りたるもの、如し、其の地面の最も高き處を極下と云ひ、此處より四方漸く下垂して其面穹状を爲し、天は之に相應じて北極

下の直上最も高くして之を北極と云ひ、是より漸く四方に低垂して笠状を爲し、日月星の三光、天なる笠蓋の裏面を回轉して以て晝夜を爲す、而して日の軌道、夏は高く冬は低く、其最も高きときは即ち夏至にして之を内衡と云ひ、其最も低きときは冬至とし之を外衡と云ふ、天の最高點即ち北極は外衡より高きこと六萬里にして、北極下の地即ち地頂は地下即ち地の外周最も卑くき處より高きこと亦六萬里なり、而して地頂と外衡との間二萬里なりと云ふ、故に天頂の地下を距ること八萬里にして、冬至の日、外衡にあるとき其の地頂を出

六
づること二萬里なれども其對當の地を距ることは八萬里なり。

抑々日は地を距ること常に八萬里にして一定の軌道を旋る、其の軌道環状を爲し、天を一周するものなれば夏時高きときは其環小にして周漸く短かく、冬時低くきときは其環大にして周漸く長し、故に夏至の日道最も長くして大環を爲し、其れより漸く短小なる環と爲り、遂に冬至に達して最も短小なる環を爲せり、此一長一短の間を分て七衡、六間とし、每衡、周徑、星數各々算術に依て勾股里差を用ゐ、日影極遊を推して以て遠近の

數となし、表股(股は髀なり)を造りて天時を得、是に由りて周髀とは名づけしなり。

凡そ日光の外に及ぼす際を以て四極と爲す、四極の周二百四十三萬里にして、徑八十一萬里なり、何となれば外衡の外、日光の及ぼす所、十六萬七千里なるを以て衡外照らす所左右合して、三十三萬四千里にして、外衡日道の徑四十七萬六千里を合して、四極の徑と成ればなり、是れ皆影を測て表股に得る所の數なりと云ふ、凡そ人、望で見る所の遠近は日光の照し及ぼす所にして、我に近づくこと十六萬七千里にして始めて日を見るこ

とを得べし、之を稱して日出と云ひ、我に遠ざかること十六萬七千里の外にして日光我に及ばず、此時に至り我亦日を見ることを得ず、之を稱して日没と云ふ。

日月四極の道を運行す、故に日の運行する所、極東なれば東方は日中、西方は夜半、日極南にあれば南方は日中、北方は夜半、日極西にあれば西方は日中、東方は夜半、日極北にあれば北方は日中南方は夜半なり、此の如く日月四極の道を運ぐるに由りて一晝夜をなし、七衡を周り六間以て六月の節に當る、六月を百八十二日八分日の五と爲す、故に日夏至に至れば東井にありて内衡を

極め、日冬至に至れば牽牛にありて外衡を極むるなり、更に回りて夏至に至り、冬至に歸る、日は實に一歲中、一たびは内極し、一たびは外極す、月は則ち三十日十六分日の七にして、一たびは外極し、一たびは内極す。

已に述ぶるが如く、北極は天の中心にして北辰のある處なれば、日月及び衆星は之を軸として回る、故に地下より地頂、即ち極下に近づくに従ひ、夏時は漸く晝長く、夜短かく、冬時は之に反して地下より極下に至るに従ひ、晝短かく、夜長し、例へば夏時北極の出地五十五度の處に至れば、晝七十刻、夜三十刻、六十度の處に至れば、晝

八十二刻、夜十八刻にして、冬時は之に反す、其六十五度即極下の左右合して百三十度の處よりは、日常に見はれて没せず、日の運行、中天に環状を畫きて回り、夜は衆星亦環状を畫きて回ること恰も傘蓋の如く、爾り、蓋天の稱、茲に由りて起る、尙進んで極下に至れば、日見はれて没せざること半歳、日没して見へざること半歳、故に曰く、極下の地六月は日を見るも六月は日を見ず、一歳は此地の一晝一夜なりと。

蓋天の説、實に支那の大古に起りたるものゝ如し、彼三代の世能く天文を説くもの、甘氏、石氏、巫咸氏の三家あ

り、其唱ふる所、蓋天説なるが如し、又周公孔子の天を論ずる亦往々蓋天のことあり、論語に所謂北辰の其所に居て衆星之に拱ふか如しとあるは、蓋し此謂乎、降て三國の時、吳の太史令陳卓三家の説を採擇し、其時代に存ざる舊圖を參考して圖録を著はし、此説の大成を謀りしと云ふ、其後楊雄、鄭玄、蔡邕、葛洪の徒、別に渾天説を唱ふ、其説に曰く。

第三 渾天説

天地の形狀は鳥卵の如く、天は地外を包みて大なり、地は天内に在りて小なり、天は卵の外殻の如く、地は中黄

の如し、天地の中間、氣を以て満たすこと恰も卵の精白の如し、天地の關係已に此の如し、而して天の四方即此大宇宙は水を以て覆はる、故に曰く天地は氣に乗じて立ち水に載せられて行く、周天の度之を中分して半は地上を覆ひ半は地下を繞ると、宇宙の状態實に此の如く渾々然として名狀すべからず、故に渾天とは云へり、而して其四方水なるの證を擧げて曰く、地上、水の大なるもの海洋あり彼陽精なる日輪、其光曜炎熾、一夜水に入りて經る所即焦竭するも地上の百川海に歸注して之を補ひ、熱せられたる水は晝間亦冷却

して海を満たし、一冷一熱相循環して旱魃にも減ずるとなく霖雨にも溢することなく或は昇りて雨雪となり流れて地上の川と成る、是れ皆天外渾たる水の一端此の地上に其の餘瀝の存ずるありて其一例を吾人に示すものなり、且又莊子の謂ゆる北溟の魚化して鳥と爲る將に南溟に徙らんとすと云ふが如き、易に云ふ時に六龍に乗ずと云ふが如き、四方皆水あるの證なり、夫れ魚は水中に居り、鳥は氣中に住む、即ち大宇宙界を遊泳するの生物、一たび此地上に來れば鳥と爲りて翹けり、龍は水に居るもの、以て天に比す、日は陽物、又水中に

出入すること龍と相似たり、此れ亦天の水中に入るの象なりと。

天地已に氣に乗じて立ち水に載せられて行く、周天三百六十五度四分度の一、之を中分すれば半は地上を覆ひ半は地下を繞る、故に二十八宿、半は見はれ半は隠る、其の二端、之を南極北極と云ふ、北極地を出づること三十六度、南極地に入ること三十六度、兩極相距ること一百八十二度半強、北極を繞ること徑し七十二度、常に見はれて隠れず、之を上規と云ふ、南極を繞ること七十二度、之を下規と云ふ、赤道を去ること、各九十一度少強、日

の行く所を黃道とす。

以上は渾天説の概畧なり、此説もと丹陽の葛洪等が唱へてより世に行はれ、前漢武帝の大初中に落下閎始めて渾儀を制したるも未だ備はらず、宣帝の世に及びて耿壽昌、銅を以て圓儀を造り以て歷度を考へ、東漢の和帝の時に賈逵、繫作して更に黃道を加へ、順帝の時に及びて張衡渾象を制して内外の規、南北極、赤黃道を具して、二十八宿中外の星官及び日月五緯を列ね、漏水を以て之を殿上に轉じ、室内の星宿出沒して天と相應ず、吳の陸績、渾象を造り、王蕃更に劉洪が乾象曆の法により

て渾儀を改制して論を立て度を考ふ、晉の末、戦亂相尋で舊器散逸す、降て宋の高祖長安を平げ、衡か舊器を得たるも、經星七曜を綴らず、宋の文帝の時、太史錢樂之に詔して更に渾儀を鑄る、其徑六尺八分少、周り一丈八尺二寸六分少、地、天内に在りて、黃赤二道、南北二極の規、二十八宿、北斗極星を立て五分を一度と爲す、日月五星を黃道の上に置いて、漏刻を立て水を以て儀を轉じ、昏明中星天と相應ずと、御史中丞何承天亦渾儀を考測して其意を研究せりと云ふ。

渾儀は古へ其法ありしも、暴秦、書を燔くに遭ひて共に

滅すと云ひ、或は此時天官星占の類は存じて毀たず、渾天儀亦尙ほ秦の候臺に存せりと云ひ、或は古へ和氏の舊器より出づと云ひ、或は衡以前此器なし、衡、陰陽を考歩して渾天儀を創製せりと云ひ、或は舊器を増修改作せしなりと云ひ、諸說紛紜何れが信なるや知るべからず。

渾蓋二天の説已に述ぶるか如し、而して此二説互に學者の争ひとなり、渾天論者は蓋天説を駁し、蓋天論者は此道聖人の遺教なりとして大に渾天説を排せり、此間漠たる宣夜の説は起れり。

第四 宣夜說

漢の秘書郎鄒萌先師の說と稱して漢たる一說を唱ふ、曰く今仰で晴天を瞻れば一躰綠色なる玻瓈に似て、夜に入れば燦然たる幾千の衆星、此玻瓈板上に繫付せるが如き、此宇宙實に形躰あるに似たるも、其實無形無質にして只無窮に廣きが故に肉眼爲めに眩惑せられて蒼たる色相を呈するのみ、今遠山を望で青きも、千仞の浴谷に臨みて黒きも、其青と黒とは眞色にあらず、實躰あるにあらず、齊しく是れ空間なり。夫れ天は彼の蓋天說の如く傘形なるにあらず、渾天說

の如く水あるにあらず、天は高遠無極の空間なるに外ならず、日月星辰は自然に此虚空中に浮て其行くと止まるとは無色無形の氣あるを以てなり、彼の七曜、或は逝き或は止まり、或は順或は逆伏見常なく進退同しからざるは、根繫する所なきが如き氣中に懸るも、衆星と西に没せざる辰極は、常に其の定所にありて動かざると、虚空の氣性之に相反抗するの關係あるを以て、彼の日に東行するの攝提、填星或は日の如き月の如き行動遲速一定して變更することなしと。宣夜の說必竟茫として其要を得ず、或は云ふ此說古へ

聖者の唱導せし所なるも今傳はらずと、渾蓋宣夜の三説之を支那古代の三家と云ふ、後更に四説あり之を後世四家の説と云ふ。

第五 四家説

曰く安天、曰く穹天、曰く昕天、曰く平天、之を稱して後世の四説とは云ふ、安天とは晋の成帝、咸康中に會稽の虞喜なるもの宣夜の説に因りて安天論を作りたるを始めとす、此説必竟宣夜説を敷衍したるものに過ぎざれば亦茫として分明ならず、曰く天は高遠無窮にして測るべからざるも確乎として永久常安なり、地は廣袤無

限にして測るべからざるも永久靜定なり、天地の形狀圓と云ひ方と云ふ皆誤まれり、其圓と云ひ方と云ふは皆曆數家の假設にして、其の眞形到底人智の及ぶべきものにあらず、其の日月星辰の如き其運行不定、例へば海中に諸物の漂ふに異ならず。

穹天説は其のもと蓋天より出でたるものゝ如し、虞家族祖河間の大守聳が立つる所なりと云ふ、曰く天の形は穹窿として雞子の其の際を慕するか如し、周り四海の表に接して元氣の上に浮ぶ、其狀例へば奩を覆ふて以て水を抑して没せざるが如く、氣其中に充つるを以

て天は之を覆ふ蓋にして、天の極あるは猶蓋の斗あるが如し、日は地中より出で、地中に入るが如くなれども、其の實辰極を繞り西に没して東に還るものにして、決して地中より出入するものにあらず、日は黃道を行て極を繞り循環して止むときなし、而して斗極の下は地の中心にあらず、地の中心即ち當對の天地は卯酉の位置なり、故に天は北の方地より下くきこと三十度、極の傾て地の卯酉の北にあること亦三十度、人は卯酉の南にあること十餘里にして、極は北黃道を去ること百十五度、南黃道を去ること六十七度、而して二至の舍る

處以て晝夜の長短を爲せりと。

听天とは吳の太常姚信か造る所と稱す、其の説く所、甚だ奇異にして人を以て主とせるもの、如し、曰く人は靈蟲にして其形最も天に似たり、人の頤は胸に臨で項は背を覆ふこと能はざるが如く、天軀の南は低れて地に入り、北は秀で、高し、然れども其の斗極と日道との遠近高低は時に依りて同じからず、即ち冬至には斗極低れ下りて運り南に近し、故に日は人を距ること遠くして斗は人を距ること近し、此時に方り北天の氣至るが故に氷寒なり、夏至には斗極立ち上りて、運り北に近

し、故に日は人を距ること近くして斗は人を距ること遠し、此時に方り南天の氣至るが故に蒸熱なり、極の立つとき日は地を行くこと淺きが故に夜短かく、天は地を距ること高きが故に晝長し、又極の低るゝとき日は地中を行くこと深きが故に夜長く、天は地を距ること低きが故に晝短しと。

平天説未だ其の出づる所を知らざれども、多く王充か論衡等にあるを見れば此時代の一説ならん乎、曰く今某地に立ち仰で天を視れば穹窿として己れの頭上最も高く、四方漸く垂れて周圍大地に合するが如くなれ

ども、更に己れの位置を轉じて數千里の他所に至るも、前と同じく天は覆盆の如く四邊の垂れ下れるを見るべし、是に因りて之を見れば天の己れに近きものは高く、遠きものは低くして、これ全く人目の遠きに及ばざるの迷想に外ならず、換言すれば己れの位置變ずるに從て天躰の變ずるにはあらずして眼中一種の妄映なり、蓋し天は平正にして四方中央一躰に高低なくして恰も地面の平なるに異なることなし、故に天に從て運轉するの日月星辰、上に出で、下に入るが如く視ゆるも、其實全く天の平面に一定の軌道ありて東西に運行

するものなり、日の上りて中天に至るが如きは上るにあらず吾人に近づくを以てなり、其下りて地中に没するが如きは下るにあらず吾人に遠ざかるを以てなり。以上四説ありと雖ども彼の宣夜説と齊しく概ね一種の空想たるに過ぎず、故に支那の天文説として眞理に近きものは只渾蓋の二説のみ、而して此二説亦相矛盾する所ありて、漢の仲仁、葛洪已下李唐の諸大家より宋明時代に至るまで渾蓋の是非を論じ紛紜として決する所なかりし、従て此間種々の妄説輩出せしもの、如し、是に於て一種の折衷説は世に行はれたり。

第六 折衷説

漢の王仲任か渾天を駁して平天を唱ふるの後、梁武帝學士に勅して天地義を造るや渾蓋其の衷を取りたるもの、如し、後此折衷説多く學者の間に行はれたり、唐の李淳風、以爲らく天地は中高くして四邊に垂下し、日月相隠蔽して晝夜を爲す、北極を遶りて常に見はるもの之を上規と云ひ、南極の常に隠るもの之を下規と云ひ、赤道横に絡ふもの之を中規と云ふべしと。又嵩陽、渾蓋二天を研究して兩ながら之を審にし、玄宗の勅を奉して渾天儀圓天の象を制す、列宿赤道及び周

天の度数を具にし、水を注で輪を激し自然に轉じて晝夜を爲し、更に二輪を絡ひ綴るに日月を以てし運行自在ならしめ、天の西に旋ること一周毎に日、東行すること一度、月行十三度十九分度の七、二十九轉餘にして日月相會す、三百六十五轉して日、周轉す、木櫃を以て地平と爲し儀をして半ば地下に在らしめ、晦明朔望遲速自ら準あり、木人工を地平の上に立て、其の一は前に鼓を置き、一刻に至れば則ち自ら之を撃ちて以て刻を報ず、其の一は前に鐘を置き、一辰に至ればまた自ら之を撞ちて以て辰を報ず、皆櫃中に在りて各、輪軸鉤鍵を施し

て、其奇巧今の時計の構造の一層複雑なるものゝ如しと云ふ。

又云ふ僧一行天文に精しく最も精微を盡くす、其の大愆圖を修め覆矩圖を爲くる皆此人なり、一行曾て月行黃道を出入するを案じて圖をつくること三十六別に筧を削り度を爲す、徑り一分其の厚さ之に半す長さ圖と等しく、其の正中に穴を穿ち鍼を植て樞と爲し、以て之を回轉せしめ、中樞の外より均しく百四十度を刻し、全度の末を旋て重規を爲し、以て均しく周天の度分を配賦す、又極樞を去ること九十一度少半にして赤道帶

天の紘を爲し、極を距ること三十五度、旋て内規を爲す、乃ち冬至日纏の所在を歩して以て辰次の中を正し、以て宿距を立て、渾儀に測る所の甘石巫咸か衆星の明かなるものを按じて、皆筥を以て横に宿に入るの距を考へ、縦に極を去るの度を考へ、而して後之を圖す、其の赤道の外、衆星疏密の状と少しく殊なるものは、渾儀に由れば南極を去ること漸く近ければ其の度益々狭し、而して蓋圖は漸く遠ければ其の度益々廣し、然りと雖ども若し其の極を去ると宿に入るとの度数を考へて之を渾天に移せば則ち一なりと。

宋より明時代専ら此折衷法を用ゐたるもの、如し、而して明の末西洋流の學術支那に入り、地球儀(按ずるに地球説はもと西域より入りたるなるべし地球の説はもと西域即ち回々の札馬魯丁カッタマロウジンか造る所なり、元史の天文志に云く昔來亦阿子漢フイツライヤハスライに地理志と云ふ、其制木を以て圓毬と爲し、七分を水と爲し、其の色緑なり、三分を大地と爲す、其色白し、河湖海洋を畫き、其の中に脈絡貫串し、小方井を畫作し、以て幅圓の廣袤道里の遠近を計る、今の地球説是なりと)萬國地圖等を見るに、極下一歲を以て一晝夜を爲すこと、寒暖五帶のこと等、周牌の七

術に似たる所あるより、此説の眞なるを説き、以爲らく支那の渾蓋の義往古流れて西土に傳へたるものなり、今の印度西洋の天説、是れ其の遺法を敷衍したるに過ぎざるなりと。

降て清儒梅勿菴が曰く、歐羅巴實測の學と對照するに、此説の益々眞なるを證するに足る、然れども周髀と西説と合はざるの個所に至りては大に苦しむ、故に止むことを得ず、私意を構造して、以爲らく蓋天は即ち渾天なり、天躰は渾圓なるが故に渾天儀能く適すと雖ども、詳に其の測算の事を求めんと欲して平面に寫記し、之

を蓋天と爲したるを見れば、渾天は朔像の如く蓋天は繪像の如くなれども、總て是れ一天なりと。上來述ぶる所支那に於ける天説の梗概なり、而して別に支那に於て最も得意とする所の一説あり、何ぞや陰陽道是れなり。

第七 陰陽道

陰陽家の唱ふる開闢談の大要を擧げんに、天地の未だ形造らざるとき、此宇宙界の元氣分れて二となり、其の清輕なるもの天となり、重濁なるもの地となり、其の間冲和なるものありて人類を生ず、而して天は陽にして

動き易く、地は陰にして静なりと、何ぞ我邦の開闢説に能く似たるや、是に因りて之を見れば陰陽道の天地は如何なるものなる乎、推して知るべきのみ。

此道の説く所、主として彼の天象の異状あるは必ず人事に關係あるものにして、日月星晨の移動雲氣の變態等を占考して人の吉凶禍福運命等を豫しめ知ることを得、之に依りて災禍を避け幸福を享くることを得べき人生欠ぐべからざる要術なりと云ふにあり、此の如く其の云ふ所已に天象の變異に關す、故に其の當時の天文家曆道家は、概して此陰陽道を學び、陰陽道を唱へ

たるものなるべし、

陰陽道の始めは河圖洛書の理に出で、其の吉凶を考ふることは周の春秋戰國の時より起りし、蓋し其の當時戰爭を事として常に攻守陣取日取等の術數に思慮を回らすの際、其の吉凶禍福を豫知するの必用に應じて時の智者按出せしものなるべしと、小中村博士は云はれたり、要するに此道支那の古代に始まり、其の當時の人心に最も早く感染し従て上下一般に行はれしものなるべし、爾後漢の代となり、陰陽に五行を併せて占考を爲すこと益々盛にして、晋隋唐を経て種々の雜占と

共に廣く世に行はれ、降て宋明以來清に至るまで衰へざりしと云ふ。

第八 曆道一斑

支那の古昔曆制のことありしや明なり、而して其の法大陽曆に類似せるものを用ゐたるもの、如し、故に曰く大陰晦朔に見へ薄蝕朔望に於てすと、又曰く一歳を三百六十五日四分度の一とし小數を集めて四年に一度づゝの閏年を置くとあり、然れども周秦の間閏餘次を乖き且交食の道古へ定法なしと、往々史に見ゆるによれば、其の曆法疎にして完美なるものにあらざりし

や亦疑ふべからず、其の秦より漢の初顓頊曆を用ゐ、西漢に三統曆を造り百三十年にして稍々備はる、東漢に四分曆を造り七十餘年にして儀式方に備はる。又百二十一年にして姜笈三紀甲子曆を造り、始めて月食の衝を以て日宿の度の所在を檢することを悟る、又五十七年にして何承天元嘉曆を造り、始めて朔望及弦を以て大小を定むることを悟り、又六十五年にして祖冲之大明曆を造り、始めて大陽に歲差の數ありて極星不動處を去ること一度余なることを悟る、又五十二年にして張子信始めて日月の交道に表裏あり五星に遲

速あることを悟る、又三十三年にして劉焯皇極曆を造り、始めて日行に盈縮あることを悟る、即ち晷影の長短に準じて日行の長短を定め、以て虧食の期を求むることを得たり、又三十五年にして博仁均成寅元曆を造り、頗る舊儀を采りて始めて定期を用ふ。

漢の末より六朝に及で稍交食を論ずと雖ども、未だ詳當ならず、唐の盛なるに及で其法始めて備はる、而して古への曆元は多く上元甲子に因りて平朔を用ふるを以て交食のこと往々之を知らざるなり、平朔を用ふるとは日月並に平度を紀するを以て未だ定期の法を知

らず、唐の高宗の時司天猶ほ未だ定期の法を詳にせず、時曆天と合せず氣序多く違ふと云ふ、成寅元曆を用るてより四十六年此曆亦益疎なり、因りて李淳風麟德曆を造りて献ず、是れ高宗麟德元年甲子に作る所、故に又甲子元曆とも云ふ、淳風古曆の章部十九年を章と云ひ、章年を四つ合せ七十六年となる之を部年と云ふ、元首分の齊しからざるを以て、始めて總法を爲りて用て朔を進め以て晦晨に月の見ゆることを避く、淳風の後、嵩陽の大愆曆出で、支那の曆道大に備はる、漢晋の史に稱す、往々日蝕朔にあらず而して朔の二日

或は晦日にあるものあり、唐の李淳風が麟德曆より如めて定朔を用ふ復歲差を去りて用ゐずと、淳風より六十六年にして僧一行大徳曆を造り、初めて朔に四大小三あり、且蝕必ず朔にあることゝはなれり、一行は天學に精しく定朔の法を考へ博く懲し廣く證し、以て九服交食の異を定む、又曰く淳風は定朔を云ひ、嵩陽は歲差を發す、淳風歲差を用ゐざるは曆術の美未だ盡さず、嵩陽前に絶て後に光れり、後世曆を修むるものその範圍を出ることなじと、一行の大徳曆の後九十四年にして徐昂宣明曆を造り、始て氣刻時の三差を悟り、又二百三

十六年にして姚舜輔紀元曆を作り、始めて食甚の泛餘の差數を悟る。

又郭守敬か曆を作るや斷じて上元甲子を曆元とするを用ゐず、直に表を立て影を測りて至元辛巳を以て截算の元と爲す、即所謂授時曆是なり、授時曆又年を積で稍々疎なるを以て明改めて大統曆を造り、洪武十七年を以て曆元と爲す、羅針の宿度を推して以て交食を知る、明史に云ふ弘治中月食屢々應せず、日食亦升ふ、正徳十二三年連りに日食の起復を推して皆合はず、是に於て朱裕上言すらく至元辛巳より今を去ること二百三

十七年歳久ふして差なきこと能はず、若し量て損益を加へざれば恐らくば愈々久ふして愈々舛わん、半は古法を推し半は新法を推し、兩ながら相交て回々の科を驗し、西域の九執曆の法を驗し、往復参考せば、則ち交食正すべく、而して七政齊ふすべしと、此時に方りて西洋の天學士漢土に在りて盛に西洋の天文學を唱へしと云ふ、是に於て明別に回々曆を譯して天下に頒行す、終明三百年復之を易へす。

元明の間回々の天學盛に支那に行はる、回々曆はもと九執曆に出づ、九執曆は西域に出づ、唐の開元六年大史

令瞿曇氏の譯する所なり、其の開元二年二月朔を以て曆首と爲す、其の計算法籌策の布算を用ゐず、唯文字の筆記を以てす、一行其の術を寫して大憲曆を作ると云ふ、而して元に在りて一時行はれたる萬年曆、亦此法によりて作りたるもの、世祖の時之を頒行し十八年に至りて改めて授時曆を用ゐしなり。

明より清に至り即現今の大陰曆は行はるゝに至れり要するに支那曆其の初は大陽曆の制なりしも種々の變遷を経て今の大陰曆と稱する一種の曆道を保ち來れるなり。

支那天文學終

明治廿九年六月四日印刷
同 廿九年六月七日發行

定價金拾錢

著者兼
發行者

東京市麹町區上六番町廿五番地錦松館
藤山甚太郎

印刷者

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
島連太郎

印刷所

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
株式會社 秀英舍

發賣所

東京市京橋區尾張町新地四番地
巖々堂



版權
所有

支那天文學終

明治廿九年六月四日印刷
同 廿九年六月七日發行

定價金拾錢

著者兼
發行者

東京市麴町區上六番町廿五番地錦松館

藤山甚太郎

印刷者

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

島連太郎

印刷所

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

株式會社 秀英舍

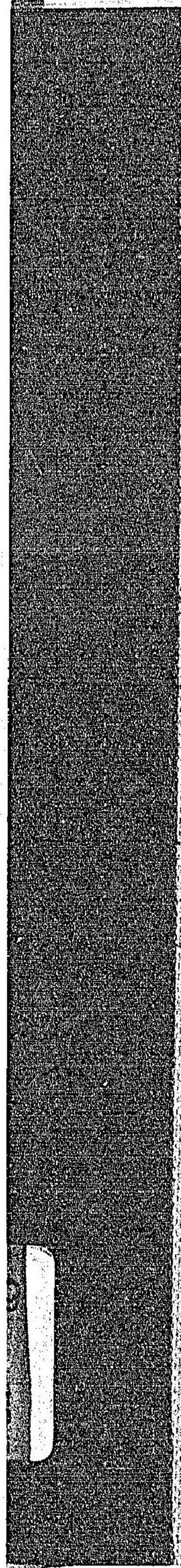
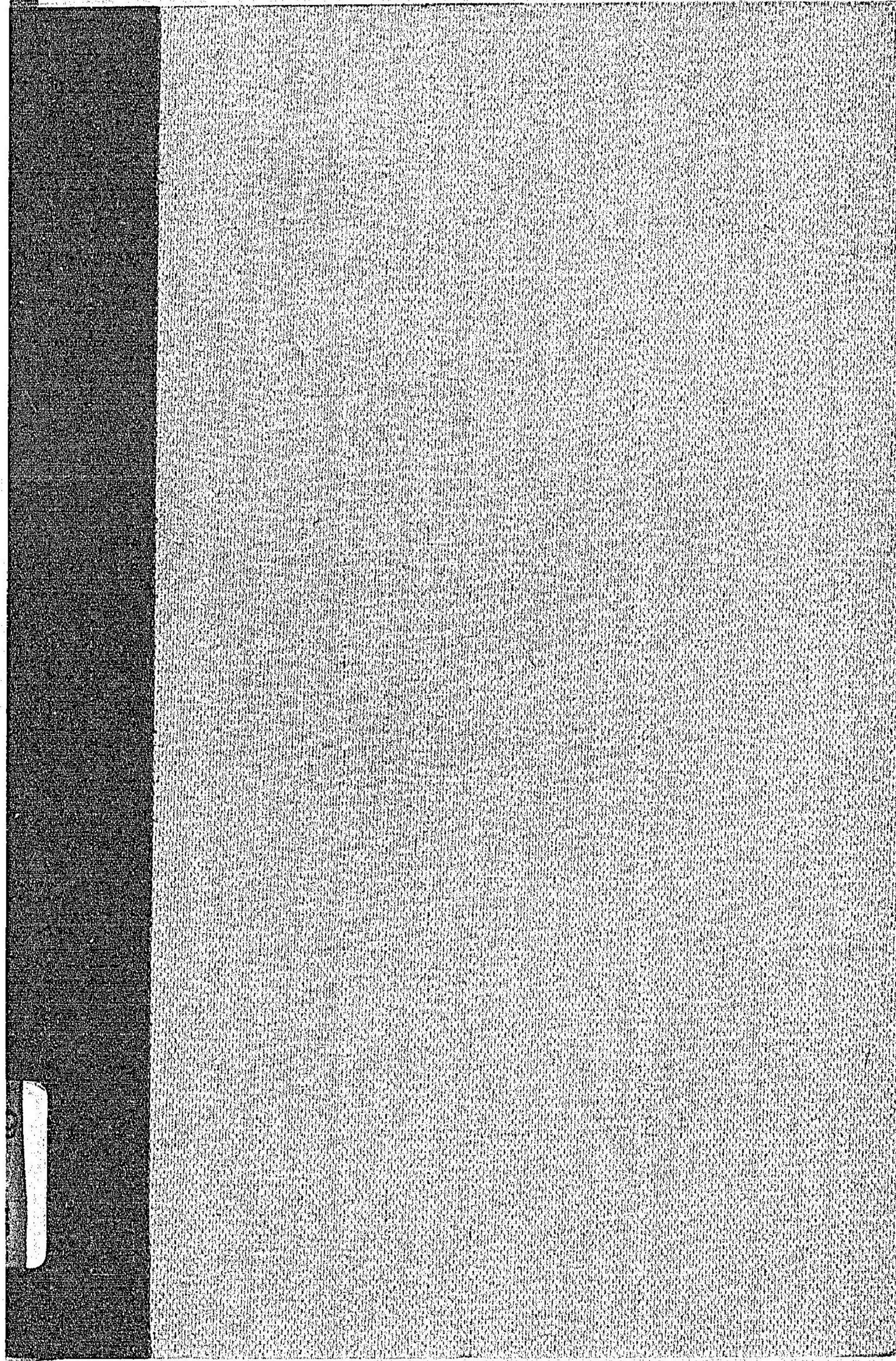
發賣所

東京市京橋區尾張町新地四番地

巖々堂

版權
所有

2/21



056148-000-5

特29-935

支那天文学

藤山 甚太郎(天狂) / 著

M29

CAK-0028

